

白雲片片

第十回

生か、死か。

今回は道吾圓智禪師と、弟子の漸源

仲興禪師、石霜慶諸禪師が登場する古

則を紹介致します。

正法眼蔵三百則 第二十九則

『潭州漸源仲興和尚、因みに道吾と

同に一家に去きて弔慰する次いでに、

師、棺を拵ちて云く、生か、死か。吾

云く、生とも道わじ、死とも道わじ。師

云く、甚と為てか道わざる。吾云く、道

わじ、道わじ。回りて中路に至り、師云く、和尚、快やかに某甲が与めに道うべし、若し道わずんば和尚を打ち去らん。吾云く、打つことは即ち打つに任す、道うことは即ち道わじ。師、即ち吾を打つこと数拳す。吾、院に帰りて云く、汝、宜しく此を離れ去るべし、恐らくは知事、知ることを得ば便ならじ。吾の遷化して後、師、石霜に至り、前話を挙して請益す。霜云く、生とも道わじ、死とも道わじ。師云く、甚と為てか道わざる。霜云く、道わじ、道わじ。師、言下に省有り。』

現代語訳／「源」は漸源仲興禪師、「吾」は道吾圓智禪師、「霜」は石霜慶諸禪師。※原文中の「師」というのは道吾禪師のことではなく、漸源禪師のこと。

昔、中国の潭州という所にいた漸源禪師が、師匠の道吾禪師の元で修行していた頃の話です。ある家で死人が出たので、師匠と一緒に後悔やみを言いに行つた際、漸源禪師は死人が入っている棺を叩いて師匠に質問をしました。

源「この中の人は生きていますか、死んでいますか」。

吾「生きておるとも言わんし、死んでおるとも言わん」。

源「どうして答えて下さらないんですか」。

吾「言わん、言わん」。

その帰り道、漸源禪師は師匠が自分の質問に答えてくれなかつた事が気に掛かり、師匠に言いました。

源「和尚さん、どうか今すぐここで先ほど私が申し上げた質問の答えをして下さいませんか。もし和尚さんが答えて下さらないならば、私は和尚さんを打ちます」。

吾「打つのは一向に構わんけど、生きておるとか死んでおるとか、その事については何も言わん」。

漸源禪師は、自分は真剣な気持ちで質問をしているのに答えてくれない師匠を、(約束通り)拳で数回殴りました。

そして道吾禪師はお寺に帰ってから

漸源禪師に言いました。

吾「お前はこの寺からそつと出て行った方が良い。もしこの寺の役僧が、お前が出て行くことを知ったなら色々騒ぎになる」。

時がたち、道吾禪師が亡くなった後、漸源禪師は兄弟子の石霜禪師を訪ね、前述の生か死かのやりとりの話をし、教えを請いました。

霜「生きておるとも言わんし、死んでおるとも言わん」。

源「どうして道吾禪師と同じく答えて下さらないんですか」。

霜「言わん、言わん」。

この時、漸源禪師は、道吾禪師と石霜禪師が何を伝えたかったのかが分かりました。

普段、私たちは生活の中でありとあらゆる物、現象に名前を付けて呼んでいます。この古則を読むと、私たちが日常で使っている言葉や文字などは全て、人間がとりあえずそう決めていくだけのことであって、宇宙全体の決まりとしてそういう呼び方があるわけではなく、生きていくか死んでいくかということについても簡単にはつき

りと言えないという事が分かります。仏教は、多角的な捉え方をする教えで、一面だけを見て結論を出すことを非常に嫌います。言葉や文字が使えなかったら、現代人は不便すぎて生き辛いでしよう。この文章も書くことができません。しかし、現実というものを言葉や文字で明確に表現しきれぬのかと言うと、首を傾げたくなるのも事実です。

わが日本曹洞の祖・道元禪師の著作の中には「恁麼(いんも)」という言葉という言葉は、元々は中国語で「あれ」とか「これ」という意味があるようですが、道元禪師は、言葉で表現できない何かを示す場合に「恁麼」という言葉を使っているようです。例えば坐禅のやり方を指南した「普勸坐禅儀」の中にはこう出てきます。

「・・・久しく恁麼なることを為さば、

須らく是れ恁麼なるべし。宝蔵自ずから開けて、受用如意ならん」。

現代語訳「長い時間にわたって、言葉で表現できないこの坐禅の修行をするならば、例外無しに、言葉では表現できない何かに自分自身がなるであろう。宝をたくさん入れた蔵の扉が自然に開き、その中にある宝を自由に受け取り、自在に使うことができるであろう」。

宝をたくさん入れた蔵とは何のことでしょうか。それは坐禅をするその人自身に他ならないのではないのでしょうか。もしかしたらこの素晴らしい世界そのものを示しておられるのかもしれない。ただ一生懸命、坐禅することをお勧めした道元禪師が「恁麼」という言葉を使って坐禅の内容を説かれたという事については、よくよく研究してみたいといけないことかもしれません。参考文献・西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱上巻一」、同著「普勸坐禅儀講話」

